

## 過去のいじめ経験が大学生に及ぼす影響Ⅱ

——いじめ経験が友人関係と自尊感情に及ぼす影響性——

金子 功一

植草学園大学発達教育学部

本研究では、大学生 117 名（男性：31 名；女性：86 名）を対象に、過去のいじめの影響を長期的に捉えるために、過去のいじめが現在の友人関係と自尊感情に及ぼす影響について検討することを目的とした。いじめの否定的な影響の「情緒的不適応」は友人に対する価値観と友人との葛藤解決効力感に有意な負の影響を及ぼし、「情緒的不適応」や「他者評価への過敏」は自尊感情に負の影響を与えていた。いじめの肯定的な影響の「他者尊重」は価値観と葛藤解決効力感に有意な正の影響を及ぼし、「精神的強さ」は自尊感情に正の影響を与えていた。今後の課題として、ピア・サポートやストレスマネジメントを実践することでいじめ防止対策を推進していくことや、電子機器等の情報メディアの活用がいじめにどのような影響を与えるかについて調査する必要性を論じた。

**キーワード：**過去のいじめ経験，大学生，長期的な影響，友人関係，自尊感情

### 1. はじめに

文部科学省の調査（文部科学省，2018）では、平成 29 年度の小・中・高等学校及び特別支援学校におけるいじめの認知件数は 414,378 件であり、前年度の 323,143 件より大幅に増加していることが報告された。また、いじめの態様の中でもパソコンや携帯電話等を使ったいじめは、12,632 件（前年度 10,779 件）で、いじめの認知件数に占める割合は 3.0%であることが指摘された。このように、いじめの認知件数が増加の一途を辿り、いじめの態様も複雑化している中で、今まで研究が十分になされて来なかった長期的ないじめの影響を詳細に検討する必要があると考える。

坂西（1995）が指摘している様に、現代のいじめは、からかいやけんかと明確に区分できるものではなく、どこからがいじめで、逸脱行動と言えるか、という境界が不明確なグレーゾーンで発生している。また、森田（2001）は、いじめに関わる役割には、被害者・加害者・傍観者・観衆の 4 層構造があ

ることを示し、加害者・被害者の 2 者だけでなく、いじめ場面を見て、はやし立てたり見て見ぬふりをしたりする者がいると述べている。こうした知見から、いじめを捉えるための視点として、いじめ当事者の体験を振り返るだけでなく、当事者を取り巻く人との関係も考慮する必要があると考える。

現代社会における核家族化や少子化、高度な情報化等は家族や友人関係の機能を変化させ、格差社会は、社会全体の関係性の希薄さを生み出した。親から自立していく過程である児童期から青年期の友人関係は重要な意味をもつと考える。そして、その時期のいじめ経験は、青年期後期の大学生における適応状態とも関連するだろう。

いじめは様々な原因が複雑に重なることで起きる現象であり、いじめの原因やその後の影響性に関する幅広い研究が行われている。いじめは対人関係の病（野中・永田，2010）であり、いじめが起きる関係性の中では役割転換が行われていることから、友人関係や自尊感情に何らかの影響を与えられらる。しかし、友人関係や自尊感情への影響に關す

る研究が多く行われているわけではない。

研究Ⅰ（植草学園大学研究紀要，2018）では，大学生を対象に，過去のいじめ経験における実態を把握するための調査を行った。その結果，いじめられた経験は全体の6割，いじめた経験は4割であり，援助要請を行わなかった者が15%もいることが示された。また，過去のいじめ経験が大学生における現在の援助要請にどのような影響を及ぼすかについて検討を行った。その結果，いじめの影響における「情緒的不適応（心身の状態が崩しやすくなる）」は援助要請回避型（援助要請を避けて，問題を抱え込む），及び「他者尊重（他者に思いやりをもてるようになる）」は援助要請自立型（問題を解決できない場合にのみ援助要請をする）と過剰型（些細な問題でも援助要請をする）にそれぞれ有意な正の影響を与えていることが示された。

研究Ⅰでは，いじめの影響と援助要請との影響性を検討したものの，友人関係や自尊感情等の適応指標との関連は検討していない。そこで本研究では，過去のいじめ経験が現在の友人関係と自尊感情に及ぼす影響性について検討することを目的とした。現代青年における友人関係の希薄さ（松井，1990）やいじめによる不適応（岡安・高山，2000）等の問題が挙げられていることから，本研究は現代青年のいじめ問題を捉える上で重要な意義があると考えられる。したがって本研究では，大学生を対象とした質問紙調査を行い，過去のいじめ経験が，現在の友人関係や自尊感情にどのような影響を与えるかについて明らかにすることを目的とする。

## 2. 方法

### 1) 調査期間

2015年9月から12月

### 2) 調査対象

A大学の学生117名（男性：31名，女性：86名）

### 3) 倫理的配慮

いじめに関する調査時には，調査への参加は自由意志であること，無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られること，得られた回答は本調査以外には使用しないことを，紙面（フェイスシート）及び口頭で説明した。質問紙は，調査対象者が回答

終了後，その場で回収した。

### 4) 調査内容

① いじめの影響：いじめの影響尺度（42項目：香取，1999）。本尺度は，いじめの否定的な影響として，情緒的不適応（15項目），同調傾向（7項目），他者評価への過敏（5項目），肯定的な影響として，他者尊重（8項目），精神的強さ（5項目），進路選択への影響（2項目），の6下位尺度から構成されている（資料①）。評定は，1. 全くそう思わない～4. 全くそう思う（4件法）であった。

過去のいじめ経験を振り返る際には，いじめ経験について，「いじめられること・いじめたこと・いじめを見ること」として，個人が想起するいじめ経験が限定されないように，教示文を工夫した。

② 友人関係に関する尺度：友人関係の特徴を捉える各尺度（金子・中谷，2014）を用いた。本尺度は，友人に対する価値観（13項目），友人との葛藤解決効力感（6項目）の2下位尺度から構成されている（資料②）。評定は，1. そう思わない～4. そう思う（4件法）であった。

③ 自尊感情尺度（5項目：桜井，2000）（資料③）。評定は，1. いいえ～4. はい（4件法）であった。

なお，本研究におけるデータの一部は，研究Ⅰ（植草学園大学研究紀要，2018）と同一のものを使用している。

## 3. 結果と考察

### 3.1. 確認的因子分析

#### 1) いじめの影響尺度の因子分析結果

いじめの影響尺度を因子分析（最尤法・promax回転）した結果，想定通り6因子（ $\alpha=.68 \sim .87$ ）が見いだされた。本尺度の各下位尺度の  $M(SD)$  は，他者尊重（3.09(.49)），他者評価への過敏（2.75(.66)），精神的強さ（2.70(.58)），同調傾向（2.42(.59)），情緒的不適応（1.96(.49)），進路選択への影響（1.74(.75)）の順であった。

2) 友人関係の特徴を捉える各尺度の因子分析結果  
友人関係の特徴を捉える各尺度を因子分析（最尤法・promax回転）した結果，想定通り各1因子（ $\alpha=.87, .73$ ）であった。各下位尺度の  $M(SD)$  は，友人に対する捉え方（3.25(.47)），友人との葛藤解

決効力感 (2.83(.47)) であった。

### 3) 自尊感情尺度の因子分析結果

自尊感情尺度を因子分析 (最尤法・*promax* 回転) した結果, 想定通り 1 因子 ( $\alpha=.85$ ) であり, 本尺度の  $M$  ( $SD$ ) は 2.49(.56) であった。桜井 (2000) では単因子構造が示されているが, 本研究でも同じ因子構造が確認された。

1), 2), 3) の各尺度を用いる際は, 先行研究通りの因子構造及び各下位尺度項目を基として, それらの各下位尺度の合計得点を項目数で割り, 平均値を算出した上で用いた (表 1)。本研究で用いる各尺度を因子分析した結果, 全ての尺度において先行研究と同じ因子構造を示すことが確認された。

### 3.2. 男女差

いじめの影響尺度の各下位尺度, 友人関係の特徴を捉える各尺度, 自尊感情尺度に男女差がみられるかを検討するため,  $t$  検定を行った。その結果, いじめの影響の各下位尺度には有意な差はなかったが, 友人関係の特徴を捉える各尺度の価値観 ( $t(115)=1.41, p<.01$ ), 葛藤解決効力感 ( $t(115)=2.42, p<.05$ ) において, 男性よりも女性の方が有意に高い値が示された。長沼・落合 (1998) は, 年齢に上がるにつれて, 次第に男性よりも女性の方が信頼関係に基づくつき合い方をすることになることを指摘している。この知見から, 大学生における友人に対するとらえ方は男女間で異なる可能性が推察できる。つまり, 男性よりも女性は信頼できる友人がいることで, いじめ等の困難状況にも適切に対応できるのではないかと推測される。

### 3.3. 相関分析

いじめの影響尺度の各下位尺度, 友人関係の特徴を捉える各尺度, 自尊感情尺度との相関分析を行ったところ, 友人関係の特徴を捉える各尺度の価値観は, 情緒的不適応 ( $r=-.36(p<.01)$ ) と負, 他者尊重 ( $r=.35(p<.01)$ ) と正の有意な相関があった。また, 葛藤解決効力感は, 情緒的不適応 ( $r=-.40(p<.01)$ ) と負, 他者尊重 ( $r=.24(p<.05)$ ) と正の有意な相関があった。自尊感情は, いじめの影響尺度の他者尊重と進路選択への影響を除く, 全ての下位尺度との間にそれぞれ有意な相関があった

(表 2)。いじめを経験したとしても, 友人との関わりに意味を見だし, 友人とのトラブルを解決できるという効力感をもつことは, 心身の状態を崩すことなく, 他者に思いやりをもてたり, そのいじめを解決することで自分に自信をもてたりすることが示された。

### 3.4. 重回帰分析

いじめの影響尺度の各下位尺度を独立変数, 友人関係の特徴を捉える各尺度, 自尊感情尺度を従属変数とする重回帰分析を行った。重決定係数は全ての影響において有意 ( $R^2=.25\sim.35(p<.01)$ ) であった。いじめの否定的な影響の「情緒的不適応」は価値観 ( $\beta=-.37, p<.01$ ), 葛藤解決効力感 ( $\beta=-.45, p<.01$ ), 自尊感情 ( $\beta=-.31, p<.01$ ) と有意な負の影響があった。肯定的な影響の「他者尊重」は価値観 ( $\beta=.44, p<.01$ ), 葛藤解決効力感 ( $\beta=.36, p<.01$ ) と有意な正の影響があった。また, 他者評価への過敏と精神的強さは, 自尊感情 ( $\beta=-.22, p<.05, \beta=.33, p<.01$ ) とそれぞれ有意な影響があった (表 3)。

いじめの影響による情緒的不適応や他者尊重の各側面が友人関係の特徴を捉える価値観や葛藤解決効力感, 自尊感情に影響していたことから, いじめの影響は, 友人関係のとらえ方を見直すことにつながると共に, 他者を尊重することで, より良い関係性を形成しようとする自信にも影響すると考える。いじめの影響には, 心身の状態に影響を与えるような否定的な影響や他者との関係を捉え直すような肯定的な影響があるが, こうした影響は, 友人との関わりを捉え直すことや友人とのトラブルを適切に解決できることにつながり, 自尊感情を高めると考えられる。

過去のいじめ経験が大学生に及ぼす影響Ⅱ

表1 いじめの影響尺度と友人関係, 自尊感情の各尺度の  $\alpha$  係数, 全体及び男女別の平均値と標準偏差

	$\alpha$ 係数	全体 (N=117)		男性 (N=31)		女性 (N=86)		t 値
		Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
いじめの影響尺度								
情緒的不適応	.87	1.96	.49	2.02	.43	1.94	.51	0.71
同調傾向	.82	2.42	.59	2.44	.53	2.42	.61	0.14
他者評価への過敏	.79	2.75	.66	2.66	.63	2.77	.67	-0.92
他者尊重	.85	3.09	.49	2.97	.57	3.14	.45	-1.70
精神的強さ	.68	2.70	.58	2.64	.66	2.72	.56	-0.51
進路選択への影響	.77	1.74	.75	1.85	.89	1.70	.69	1.00
友人関係の特徴を捉える各尺度								
友人に対する価値観	.87	3.25	.47	3.05	.53	3.33	.42	<b>-2.93*</b>
友人との葛藤解決効力感	.73	2.83	.47	2.68	.38	2.89	.49	<b>-2.12*</b>
自尊感情	.85	2.49	.56	2.54	.57	2.48	.56	0.49

注1) \*は5%水準で有意を示す.

注2) 有意な差のあった箇所は太字.

表2 いじめの影響と友人関係の特徴を捉える各要因, 自尊感情におけるピアソンの相関係数

いじめの影響	友人関係の特徴を捉える各要因		自尊感情
	友人に対する価値観	友人との葛藤解決効力感	
① 情緒的不適応	<b>-.36**</b>	<b>-.40**</b>	<b>-.43**</b>
② 同調傾向	-.13	-.15	<b>-.39**</b>
③ 他者評価への過敏	.05	-.11	<b>-.38**</b>
④ 他者尊重	<b>.35**</b>	<b>.24**</b>	.01
⑤ 精神的強さ	.08	.06	<b>.26**</b>
⑥ 進路選択への影響	<b>-.19*</b>	-.05	.01

注1) \*\*は1%, \*は5%水準で有意を示す.

注2) 有意な差のあった箇所は太字.

表3 過去のいじめの影響が友人関係を捉える各尺度, 自尊感情に及ぼす影響性

いじめの影響	友人に対する価値観	友人との葛藤解決効力感	自尊感情
① 情緒的不適応	<b>-.37**</b>	<b>-.45**</b>	<b>-.31**</b>
② 同調傾向	-.16	.09	-.08
③ 他者評価への過敏	.25	-.08	<b>-.27*</b>
④ 他者尊重	<b>.44**</b>	<b>.36**</b>	-.04
⑤ 精神的強さ	<b>-.22*</b>	-.16	<b>.33**</b>
⑥ 進路選択への影響	-.16	.05	.11
重決定係数	<b>.35**</b>	<b>.26**</b>	<b>.34**</b>

注1) \*\*は1%, \*は5%水準で有意を示す.

注2) 有意な差のあった箇所は太字.



#### 4. 総合考察

本研究では、過去のいじめの影響を長期的に捉えた上で、いじめが大学生である現在の友人関係や自尊感情にどのような影響を及ぼすかについて検討を行った。その結果、いじめの影響の各下位尺度には有意な差はなかったものの、友人関係の特徴を捉える各尺度の価値観及び葛藤解決効力感において、男性よりも女性の方が有意に高い値が示された。落合・佐藤(1996)は、男性は自分に自信をもって交友する自立したつきあい方をする特徴があり、これは他者と自分がそもそも異なる存在であると認識しているため、意見がぶつかっても傷ついたり自信を失ったりはしないと指摘している。その一方で、松並・中村(2001)は、女性にとって、他者との協調的な関係を築くことが生きていく上で重要なことであると述べている。こうした知見から推察すると、男性よりも女性の方が、他者との関係を維持することを大切にしながら、他者との間で価値観や意見の相違が生じた際、他者と向き合ったり説得したりする等の積極的に関係を継続するようなつきあい方をするのではないかと考える。

また、重回帰分析を行った結果、いじめの否定的な影響の「情緒的不適応」は価値観、葛藤解決効力感、自尊感情に有意な負の影響を与えていた。いじめの肯定的な影響の「他者尊重」は価値観、葛藤解決効力感に有意な正の影響を与えていた。さらに、他者評価への過敏と精神的強さは、自尊感情とそれぞれ有意な負と正の影響を与えていた。

いじめの情緒的不適応の項目は、他者との関係を避けたり、人の言動に過敏になったりする等の「傷つける(傷つけられる)」ことを回避する内容である。香取(1999)は、いじめ被害者は再びいじめられるのではないかと不安や、もう傷つきたくないという思いから、関係性が深まるようなつきあい方をしないのではないかと指摘している。こうした不安感情が、関係性が深まらないことに影響しているのではないかと考える。また、情緒的不適応から自尊感情への負の影響性も示されたことから、いじめ経験が、友人との関係を維持・継続するための自信の低下につながる可能性が考えられる。

一方、いじめの他者尊重から友人関係の特徴であ

る価値観や葛藤解決効力感に有意な正の影響が示された。亀田・相良(2011)は、いじめ体験からの回復過程では、第一段階の「いじめへの対応」として、自己開示をすることやソーシャル・サポート、重要な他者の存在を得ることが重要であること、また、第二段階の「いじめに対する意味づけ」として、肯定的な意味づけやポジティブ思考が重要であるとしている。つまり、いじめを受けた際、周囲へのサポートを求めたり、いじめを肯定的に捉え直したりしながら乗り越えることができた時、他者を尊重するという考えに至ることができるのではないかと推察する。

さらに、いじめの同調傾向や他者評価への過敏が自尊感情に負の影響を与えていた。この結果は、現代青年は表面的な友人関係を保ちながら、その関係性の中で空虚な自信を得ていることを示唆するものではないかと考える。ただ、表面的な友人関係で得られる空虚な自信は限定的であり、その友人関係でトラブルが生じた際には自信が低下する恐れもあるため、周囲の反応を常に気に配る必要があるだろう。

#### 5. 今後の課題

今後の課題として、以下の2点が挙げられる。

第1に、深刻ないじめに発展する前に、いじめを未然に防止するための具体策を考える必要がある。近年では、ピア・サポート(久米・田中, 2015)が実践されるようになってきている。また、小・中・高校生を対象とした「ストレスマネジメント」の方法もある。これらを活かした教育実践を推奨していくことがいじめ防止対策として不可欠であると考えられる。

第2に、本研究では、いじめの影響を検討する際、友人関係の特徴を捉える尺度における価値観や葛藤解決効力感から検討を行った。ただ、現代青年における友人関係の特徴として、電子機器等の情報メディアの活用が変化したこと(臼井, 2006)から、友人と連絡を取ることが容易となったため、友人関係が希薄であっても構わないというような風潮が生じていると思われる。このような見解を踏まえると、現代青年における情報メディアの活用が、いじめの影響性にどのように関連するかについて検討する必要があると考える。

## 謝辞

本研究は、日本カウンセリング学会第52回大会で発表した内容を加筆・修正しました。本研究の調査にご協力頂きました学生の皆様に深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 第11号, 105-115.
- 亀田秀子・相良順子 (2011). 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討: いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討 カウンセリング研究, 第44号, 277-287.
- 金子功一・中谷素之 (2014). 青年期の友人関係が適応に及ぼす影響: 友人に対する価値観と葛藤解決効力感に着目して 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 第61号, 95-103.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, 第32号, 1-13.
- 久米瑛莉乃・田中宏二 (2015). ピア・サポート活動といじめ抑制に関する研究動向 広島文化学園大学学芸学部紀要, 第5号, 11-22.
- 松井 豊(1990). 友人関係の機能 齊藤耕二・菊池章夫(編)

- 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 283-296.
- 松並知子・中村晃 (2001). 友人関係における性差 日本心理学会第65回大会発表論文集, 959.
- 文部科学省 (2018). 平成29年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」(速報値)について (2019年10月11日)  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/30/10/1410392.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/10/1410392.htm)
- 森田洋司 (2001). いじめとは何か: 教室の問題、社会の問題 中公新書 128-142.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達との付き合い方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 第10号, 35-47.
- 落合良之・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 第44号, 55-65.
- 野中公子・永田俊明 (2010). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響: 体験の時期と発達の関連 九州看護福祉大学紀要, 第12号, 115-124.
- 岡安孝弘・高山巖 (2000). 中学生におけるいじめ被害体験および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 第44号, 55-65.
- 桜井茂男 (2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床学研究, 第12号, 65-71.
- 臼井利明 (2006). 現代青年のコミュニケーションからみた友人関係の特徴: 変容確認法の開発に関する研究 (Ⅲ) 大阪教育大学紀要, 第54号(2), 151-171.

資料

資料①: いじめの影響尺度 (香取, 1999) の項目内容

---

**情緒的不適応 (15 項目)**

体に不調を感じるようになった  
何もしたくないと思うようになった  
物事を否定的に考えてしまうようになった  
イライラしやすくなった  
自分はダメな人間だと思うようになった  
いじめの夢を見るようになった  
いじめを思い出させるようなことを避けるようになった  
一人でいる方が楽だと思ふようになった  
よく眠れなくなった  
自分を支えてくれる人はいないと思ふようになった  
怒りっぽくなった  
いじめ体験を思い出し、憂うつになるようになった  
警戒心が強くなった  
自分は無力だと感じるようになった  
誰にも親しみの感情がわかなくなった

---

**同調傾向 (7 項目)**

相手の考えや意見に合わせるようになった  
自分の考えや意見を言うのを抑えるようになった  
目立たないようにしようと思ふようになった  
あたりさわりのないよう人と付き合うようになった  
人と違ったことはしないでおこうと思ふようになった  
自分が不利になりそうなことには関わりたくないと思ふようになった  
みんなと同じようにしようと思ふようになった

---

**他者評価への過敏 (5 項目)**

人と常に親密な関係でいたいと思ふようになった  
人からどのように思われているのか気になるようになった  
嫌われないように人に気をつかうようになった  
誰かと一緒にいないと不安になるようになった  
人の態度に過敏になった

---

**他者尊重 (8 項目)**

人に思いやりを持って接するようになった  
相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べるようになった  
人の心の痛みが分かるようになった  
自分の気持ちや考えを相手に適切に伝える努力をするようになった  
相手の意見も尊重しながら自分の意見を述べるようになった  
自分がされて嫌なことは人にしなくなった  
友人を大切にしようと思ふようになった  
困っている人を助けたいと思ふようになった

---

**精神的強さ (5 項目)**

自分の人生を切り開いていく自信がついた  
我慢強くなった  
人に負けたくないと思ふようになった  
精神的に強くなった  
人間的に成長した

---

**進路選択への影響 (2 項目)**

将来の職業選択に影響を与えた  
大学等の志望学部に影響を与えた

---

注) 資料①は研究 I (植草学園大学研究紀要, 2018) にも掲載された。

資料② 友人関係の特徴を捉える各尺度（金子・中谷，2014）の項目内容

---

友人に対する価値観（13項目）

- 友人は所詮他人なのだから，理解し合えるはずがない\*
- 友人は所詮ライバルなのだから，信頼する方が間違っている\*
- 友人と関わったとしても，ほとんど意味がない\*
- 友人はライバルなのだから，本音で語り合うことはできない\*
- 気分がめいている時でも，友人と話していると気持ちが晴れてくる
- 友人は私にとって人生の宝物である
- 友人は所詮他人なのだから，けんか別れをしても仕方がない\*
- 友人は所詮ライバルなのだから，対立すると疎遠になってしまうものである\*
- 友人と語り合うことで，自分が成長していくと感じる
- 友人は所詮他人なのだから，理解し合えるはずがない\*
- 友人と一緒にいることで精神的に安定できる
- 友人と関わることが生きがいである
- 友人を裏切るとは，自分にとって最も卑劣なことである

---

友人との葛藤解決効力感（6項目）

- 友人と言い争いしても仲直りする方法を知っている
- 友人に裏切られたと思ったときは，自分の気持ちを素直に話して理解してもらうことができる
- 友人と意見が一致しなかった時は，お互いが納得するような見解を見つけることができる
- 友人関係の中で，友人との適切な距離の取り方がわかっている
- 友人に誤解された時は，丁寧に説明して誤解を解くことができる
- 友人に誤解された時，なぜ誤解されたかわからないことがある\*

---

注1) 資料②は研究Ⅰ（植草学園大学研究紀要，2017）にも掲載された。

注2) \*は逆転項目を示す。

資料③ 自尊感情尺度（桜井，2000）の項目内容

- 
- 私は，自分がだめな人間だと思う\*
  - 私は，自分に見どころがあると思う
  - 私はたいていの人がやれる程度には物事ができる
  - 私には得意に思うことがない\*
  - 私は，役立たずだと感じる\*
  - 私は自分が，少なくとも他人ぐらには価値のある人間だと思う
  - もう少し自分を尊敬できたらと思う
  - 自分は失敗者だと思いがちである\*
  - 私は自分自身に対して，前向きな態度をとっている

---

注) \*は逆転項目を示す。



## Abstract

### **Study on Request for Support of University StudentsⅡ Effects of Bullying Experience on Friendship and Self-esteem**

Koichi KANEKO

Faculty of Child Development and Education , Uekusa Gakuen University

In this study, 117 university students (male: 31; female: 86) took a long-term view of the effects of past bullying, with the purpose of considering its effects on current friendship and self-esteem. “Emotional maladjustment,” one negative effect of bullying, has a significant negative impact on how students value friends as well as the effectiveness of conflict resolution with friends, while “emotional maladjustment” and “sensitivity to evaluation by others” had negative impacts on self-esteem. “Respect for others,” a positive effect of bullying, had a significant positive impact on values and the effectiveness of conflict resolution, while “mental strength” had a positive impact on self-esteem.

As future issues, it is necessary to investigate measures to prevent bullying by implementing peer support and stress management, and to investigate how the use of information media such as electronic devices affects bullying.

**Keywords:** past bullying experience, college students, long-term effects, friendship, self-esteem